

松尾邦之助余聞（結）  
1939年『現代日本詩人選集』について  
— 邦之助、オーベルラン最後の共作 —

江 口 修

1939年9月3日、ドイツのポーランド侵入に対しついに英仏両国は対独宣戦布告に踏み切ることになる同年の春、4月25日ポワチエで第三版が刷り上がった筆者の手もとにある小さな本、これが第二次世界大戦前最後の日仏の知的共同作業であった。そのタイトルは *Anthologie des Poètes japonais contemporains*、<sup>i</sup> 出版社はメルキュール・ド・フランス、詩集出版で有名な書肆である。復刻なった『巴里物語』<sup>ii</sup>にその時期の記述を探るとつぎの一節があった。

その大戦争が、ついにはじまった。フランス総動員の日、キャバレの女まで、真青になってわたしの家に来て、ウイスキのがぶ飲みをしていた。ノアの洪水のように、パリのブルジョワは、南へ南へと逃げ去った。

わたしは、通信員としてパリに残り、春まで続いた「おかしな戦争」と名づけられた気味の悪い静けさのうちに、フランス軍部の人たちと、マジノ線に行ったり、落ち着きを見せるためにわざわざ催したらしい仏政府側のいろいろな宣伝旅行に加わった。

この年、メルキュール・ド・フランス社から、わたしの仏文『日本詩人アントロジ』が出版されたが、この出版は、パリにおける、わたしの最後の日本文学置きみやげとなった。<sup>iii</sup>

「わたしの」とあるがもちろんスタインニルベル＝オーベルランとの共訳である。翌年1940年の春「妊娠二か月の女房」は藤田嗣治らと最後の日本郵船便船でマルセイユを発つことになる。日本の評判も奈落の底の状態、よく出版にこぎ着けられたものだと思うが、オーベルランの思いと資金力も与かったことだろう。そのあたりの機微を知るために、訳者の緒言を訳しておく。

緒 言

今日まで、フランスの読者そしてヨーロッパの読者も、日本の古典詩の見本程度のものでしか味わうことはできなかった。たしかにそれは洗練と繊細さに拠る彫琢を極めたものであり、魅力に富むものが多かった。日本の現代詩はどうかといえば、自由な文体により、詩人が伝統の制約に縛られることなく自己を表出し、日本でも徐々に流行するところとなり、今日的表現でいうなら文学界の「ダイナミズム」を代表し、これに熱狂して若い流派や新しい雑誌が続々と生まれ、批評家からも高く評価されてもいる。この今の生きた日本の詩がほとんどフランスそして西欧で知られていない。この欠落はわれら

が遺憾に思うところであり、なんとしても埋めておくべきであると思われた。本書が出版されることになったのはこういう思いがあったからである。

読者は、現下の日本でまさにもっとも著名な詩人のひとりである川路柳虹氏の「序文」と本書の詩人紹介によって、現代日本詩人とその作品に関する必須な情報を得ることができるであろう。さらに、松尾邦之助が川路柳虹とA. スムラール<sup>iv</sup>と協力して著した『日本文学史』<sup>v</sup>を読めば日本文学全体を見渡すことができるようになるだろう。したがってこの緒言ではこのアントロジーの編者たち(下線筆者)が詩人およびその主要作品について、といっても数多く、バラエティに富んでいて大変だが、どのように考えているかを簡単に説明しておきたい。

われわれが提示する詩人たちについて、できるだけ分かりやすくまた参照に便利なように、時代順(下線原文イタリック)による配列を採用した。流派による分類だと必ず混乱が起これり挙句は編者の恣意による決定に行きつくことになるからである。なぜなら日本の作家たちは好んでさまざまな分野を試みるからである。今日の日本ではあらゆる領域で方法の探究がなされており、ある詩人は伝統的なジャンルを試みると同時に象徴派的なジャンルにも手を染めるし、またある詩人は改宗者の決意をもってではあるが、次から次へと新しいやり方を取り入れるといった具合である。その結果、われわれは本書を二部構成にし、おのおのについてその内部では時代順にたどっていくこととした。重要性においては段違いに大きく、当然ながらわれわれがその編纂に非常な労力を傾注したのが第一部であるが、ここではほとんどが「新体詩」(原文イタリック)(新形式の詩)であり、すでに説明したとおりこれらの自由詩では音節数の伝統的縛りそしてとりわけ文学的のみならず精神的な体制順応主義から解放された詩人は、己の才能と独創性あるいは審美眼のみに導かれている。第二部は、一部に比べると相当短くなってしまったが、ここであらかじめ、ひょっとして日本では伝統的な詩が完全に見捨てられてしまったのではないかと驚かれるかもしれない読者に対して答えておきたい、そう考えるのは間違いであると。否応なく伝統主義は衰えてきているが、だが伝統を信奉者たちは、偉大な才能も輩出しているのである。年代、日付については西暦にしたがった。しかし、ここで近代日本の重要な歴史区分について説明しておく。明治(1868-1912)、大正そして昭和(1912年から今日まで)という天皇の在位に対応したこの三時代は、純粋に文学的な見地から不可欠であるというよりは、日本ではふつうに用いられており、解説文や序文あるいは伝記的記述にはどうしても出てこざるをえないのである。そしてこの時代区分によれば、歴史的そして政治的な観点からと同時に精神史的そして文学的観点からも、詩人相互の関連が容易に分かるという利点もある。

さて、付け加えて述べる必要はないと思われるが、分類がすべてではない。詩選集をどのように構成するかにおいてもっとも注意を払うべき作業は「特徴的」(原文イタリック)でとりわけ出版に値する作品を選びだすことであろう。前もっての入念な精査と選択という作業が必要であったし、それは困難と逡巡をつねに伴うものであった。川路柳虹という単に偉大な詩人というだけではなく、日本でもっとも深い眼力をそなえた文芸批評家のひとりでもある彼の助言がなかったなら、おそらくわれわれは当初の目的には達することはできなかったであろう。このわれわれの感謝の表明を彼が快く受け入れてくれることを望む次第である。

最後に、この仕事を初期からの協力者であったジャン・ペドロンのと終えることができなかつたことを心から悔やむ。日本を深く理解した日本の友人である彼の早すぎる死によりかけがえのない協力が途絶えてしまったからである。<sup>vii</sup>

末尾に K. M. et ST. O. とイニシャルでサインが入っているこの緒言は、続く序文を書いた川路柳虹と三人あるいはジャン・スムラールそして夭折した友人ジャン・ペドロンを加えた五人の戦争へと突き進む「狂った世界」とりわけ詩的抒情の一切を圧殺しつつあった軍国日本へのささやかながら渾身の一撃としてあったとも考えられる。もちろん彼らの選択の中にはその軍国日本のファナティックな激情を体現している詩人もいることにはいる。筆者は戦後の日本詩壇の動きは表面的な理解しかしていないが、藤田嗣治が日本を捨てたことに象徴されるように、戦後、戦争協力者に対する完璧な無視と執拗な排除が存在したことに注意を喚起しておきたい。それを明らかにする意味で、「選択された」詩人たちを一覧に供し、若干の情動的補遺をほどこしておこうと思う。

#### 第一部 新体詩を作った詩人たち 明治、大正、昭和 (1939年まで)

- 土井 晩翠 (SANSUI TSUCHI)  
島崎 藤村 (TOSON SHIMAZAKI)  
岩野 泡鳴 (HOMEI IWANO)  
野口米次郎 (YONE NOGUGHI、目次では YOME NOGUHI)  
蒲原 有明 (YUMEI KAMBARA)  
薄田 泣菫 (KYUKIN SUSUKIDA)  
与謝野明子 (Mme AKIKO YOSANO)  
高村光太郎 (KOTARO TAKAMURA)  
北原 白秋 (HAKUSHU KITAHARA)  
石川 啄木 (TAKUBOKU ISHIKAWA)  
千家 元麿 (MOTOMARO SENKE)  
川路 柳虹 (RYUKO KAWAJI)  
萩原朔太郎 (SAKUTARO HIGIWARA)  
三木 露風 (ROFU MIKI)  
室尾 犀星 (SAISEI MURO)  
三富 朽葉 (KYUYO MITOMI) 普通は「くちは」と読む  
北川 冬彦 (FUYUHIKO KITAGAWA)  
柳澤 健 (TAKESHI YANAGISAWA)\*  
佐藤惣之助 (SONOSUKE SATO)  
富田 碎花 (SAIKA TOMIDA) 「とみた」と濁らないのが普通  
日夏耿之介 (KONOSUKE HINATSU、目次では HONOSUKE HINATSU)  
西條 八十 (YASO SAIJO)  
生田 春月 (SHUNGETSU IKUTA)

堀口 大学 (DAIGAKU HORIGUCHI)  
 佐藤 春夫 (HARUO SATO)  
 百田 宗治 (SOJI MOMOTA、目次ではSOJI MOJITA)  
 平戸 廉吉 (RENKICHI HIRATO)  
 深尾須磨子 (Mme SOUMAKO FOUKAO)  
 西脇順三郎 (JUNZABURO NISHIWAKI)  
 大木 敦夫 (ATSUO OHGUI)\*\*  
 丸山 薫 (KAORU MARUYAMA、目次ではKAORU MARUMAYA)

二人を除くと当時であれば納得の「選択」である。第二部にも登場する与謝野晶子、北原白秋、石川啄木はまさに万能の天才であるが、現在からみて宮沢賢治が選ばれていないのは川路柳虹のモダニズムとは合わないためであろうか。さてアステリスクを施した二名については『詩選集』の紹介記事では情報不足の感を免れないと思われるので補足しておこう。

#### \* 柳 澤 健

旧会津藩士で女学校校長柳澤良三の長男として1880年福島県会津若松市に生まれる。会津中学校（のち福島県立会津高等学校）から一高、東京帝国大学仏法科に学び、1915年（大正4年）5月卒業。逓信省に入り同年10月文官高等試験に合格。横浜郵便局長心得在職中の1919年（大正8年）4月辞職。大阪朝日新聞社に入社し論説班に所属した。その後外務省に勤務し、フランス、イタリア、メキシコなどに駐在。ポルトガル公使館一等書記官を最後に退官し日泰文化会館館長を務める。その傍ら大学時代に島崎藤村、三木露風に師事して認められ詩人としても中央詩壇で活躍し「果樹園」、「柳澤健詩集」などを発表した。外務省文化事業部の課長当時、日本ペンクラブの創設にも尽力し（初代会長は自らが敬愛する島崎藤村）、当時軍国主義路線で孤立しつつあった日本文化の伝播に努めた。退官後は評論家として活躍し、故郷会津地方の校歌も多数手がけ、母校をはじめ詩を提供した校歌は24から26に上る。

戦後は出版事業に関わり「世界の日本社」を設立。最後の軍令部総長豊田副武の回顧録などを出版した。

いわゆる「官界詩人」の典型であるが、藤村と邦之助の付き合いなどが「選択」に影響していると思われる。

#### \*\* 大 木 敦 夫

詩人・翻訳者・作詞家。本名は軍一（ぐんいち）。1932年までは篤夫（あつお）と名乗っていた。1895年広島市天満町（現在の西区天満町）出身。太平洋戦争（大東亜戦争）中の戦争詩で有名だが、児童文学作品他、『国境の町』などの歌謡曲、『大地讃頌』をはじめとした合唱曲、軍歌（戦時歌謡）、社歌、校歌、自治体歌の作詞も多い。終戦後の文壇やマスコミは大木を徹底して無視、疎外し、反論の機会すら与えずに詩壇から抹殺しようとした。同様の陰湿な迫害を受けた人物として、小説家の中河与一、洋画家の藤田嗣治が挙げられる。大木自身も戦争中の活動を『はりきり過ぎた』と指摘されたことに対し『顔から火が出るほど恥ずかしかった。』としているが、これは自分の行為や詩そのものを否定するものではない。『（前略）堂々とわたしを

松尾邦之助余聞(結) 1939年『現代日本詩人選集』について - 邦之助、オーベルラン最後の共作 -

やっつける人がなくて、すべて私を黙殺してゐるから、その向きに対しても、私は答へる術を知らないのである。』と述べている。1977年没。

彼について『詩選集』では「日本の前衛詩人でもっとも抜きんでたうちの一人」、「トルストイの影響を受ける。が、個人主義の魅力と社会主義の要請との間で揺れ動く」<sup>10</sup>と戦前のいわば典型的な「インテリゲンチャー」として紹介。だが戦争に向かう中、上で述べたとおりの行動をとった。

## 第二部 短歌と俳句

### I. 現代歌人

正岡 子規 (SHIKI MASAOKA)  
佐佐木信綱 (NOBUTSUNA SASAKI)  
与謝野鉄幹 (TEKKAN YOSANO)  
島木 赤彦 (AKAHIKO SHIMAKI)  
金子 薫園 (KUN-EN KANEKO)  
与謝野晶子 (Mme AKIKO YOSANO)  
斎藤 茂吉 (MOKICHI SAITO)  
前田 夕暮 (YUGURE MAEDA)  
北原 白秋 (HAKUSHU KITAHARA)  
若山 牧水 (BOKUSUI WAKAYAMA)  
石川 啄木 (TAKUBOKU ISHIKAWA)

### II. 現代俳人

内藤 鳴雪 (MEISESTSU NAITO)  
村上 鬼城 (KIJO MURAKAMI)  
河東碧梧桐 (HEKIGODO KAWAHIGASHI)  
正岡 子規 (SHIKI MASAOKA)  
高浜 虚子 (KYOSHI TAKAHAMA)  
荻原井泉水 (ISENSUI OGIWARA)、普通は「せいせんすい」  
高田 蝶衣 (CHÔI TAKADA)  
白田 亞浪 (ARO USUDA) \*

\* 白田亞浪については、松尾邦之助の自選の「アントロジー」<sup>11</sup>の選をそのまま採用している。彼が自称とはいえ「真正皇道派」を自認していたことはある意味でこの『詩選集』の編纂時期の困難さを物語るものか。詩人の紹介をそのまま訳しておく。

1889年小諸生まれ。若くして上京、赤貧洗うがごとの生活を送るが、法政大学を卒業。その後10年間、様々な新聞に参画。その後、新精神を吸収し俳諧の出版を開始。

その代表的な作品は『炬火』、『黎明』、『俳句を求むる心』、『芭蕉を中心として』そして『自然の詩的概念』である。<sup>x</sup>

松尾邦之助をめぐる論考、考証については、まだまだやるべきことが残ってはいるが<sup>xi</sup>、本稿をもって終わりとしたい。今日どうやらフランスはわれわれが思っている以上に遠い存在になりつつあるようだ。たしかにヨーロッパの理解は多大な努力を必要とするが、前のめりのグローバリズムから一歩退いて考えるためにも、もう一度のアクセスを試みる必要があるだろう。いわばほとんどその全生涯をかけてフランスと日本の相互理解に努めた邦之助はもう一度どこるか常に思い出すべき存在である。

- 
- i KUNI MATSUO & STEINILBER-OBERLIN, *Anthologie des Poètes japonais contemporains*, 3ème édition, 1939, Paris, Mercure de France. 4月段階ですでに第3版ということは相当な売れ行きであったことが推測される。ちなみに価格は16fr. 50である。
- ii 松尾邦之助『巴里物語【2010復刻版】』、社会評論社、2010。
- iii 同上、p. 298.
- iv A. Smoular : Alfred Smoular (1911-1994)のこと。パリ大学卒業後、トロカデロの人類学博物館に勤務、ここで松尾邦之助と知り合い1934年来日している。雑誌「フランスージャポン」を共同で創刊。第二次世界大戦勃発とともにフランスに帰国、サルトルの周辺でレジスタンスと協力して反独活動に従事。ナチに逮捕されアウシュビッツに送られるが生き延びる。戦後再びAFPおよび雑誌Paris Matchの極東特派員として来日。日本人女性と結婚。
- v Kuni MATSUO, *Histoire de la littérature japonaise des temps archaïques à 1935*, Paris, E. Malfère, 1935.
- vi 不詳だが、*Echelles de Soie. Poèmes inédits de Jean Pédron*, Paris, A la Belle Edition, 1924という詩集があり、ひょっとして作者か。
- vii 前掲書、pp.5-6.
- viii 同上、p.237.
- ix 江口「狂い始めた世界—パリの松尾邦之助（終章）」、小樽商科大学人文研究、第122輯、2011、p. 81.
- x 前掲書、p. 297.
- xi 例えば、『詩選集』全作品の原題確定は是非達成すべきで、筆者も試みてはいるが予想外に困難な作業である。完了した暁には資料集としてなんらかの形で発表するつもりである。

補追：本稿脱稿後、邦之助の娘婿にあられる片山厚北海道大学名誉教授より、邦之助から正路宛に送られた、昭和3年11月5日付の葉書をお送り戴いた。伝書によるこの短信については次回予定の「資料集」に採録させて頂きたい。ここに記して感謝申し上げる次第である。